

駅がたなぐ風景

■ 線路の作る2つの風景



線路のスケールを軸とした風景は、都市のまち並み、中央線の線路とともに発展を続けてきたまちであり、現在も丸ノ内線や東西線などの乗換駅として多くの人脚に利用されているが、複雑な地上GLを走る列車などの影響でローカルな駅舎の雰囲気と、現代的スケールが混在した駅前風景を作り出している。

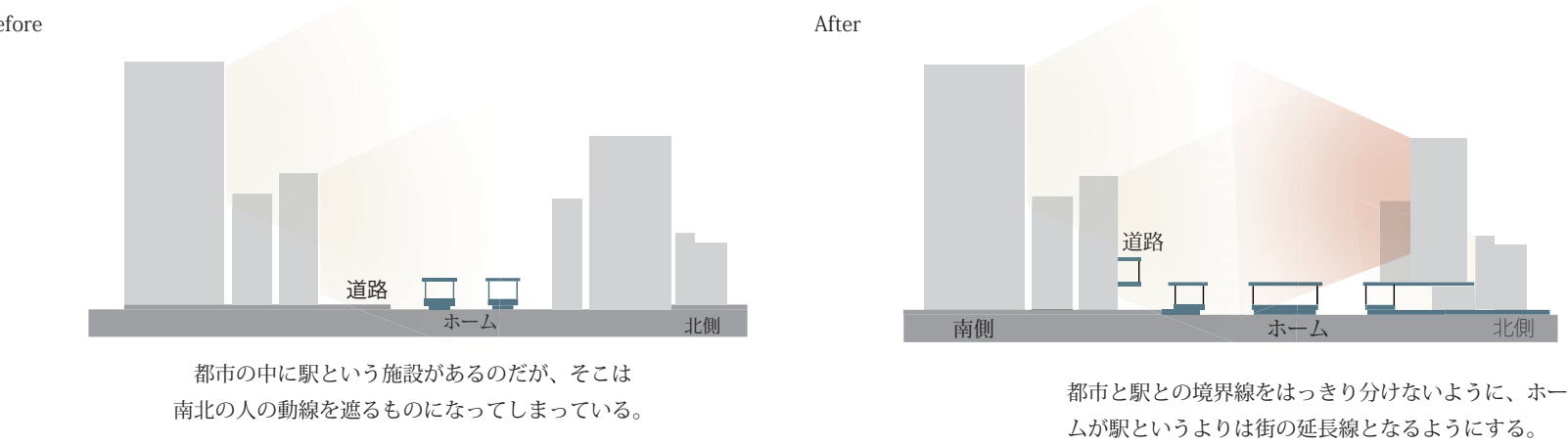
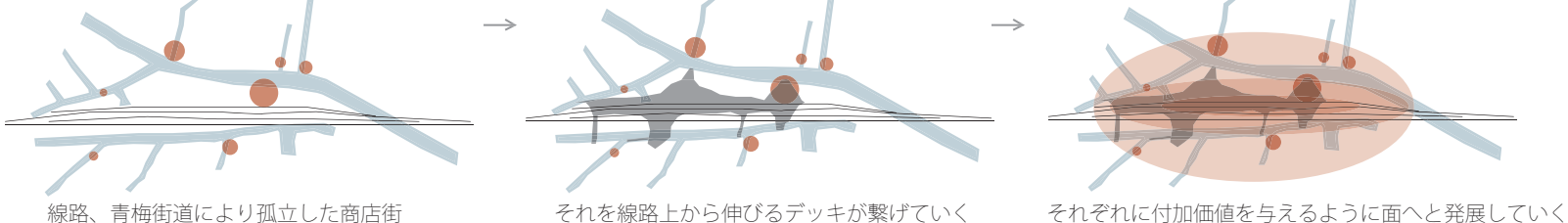
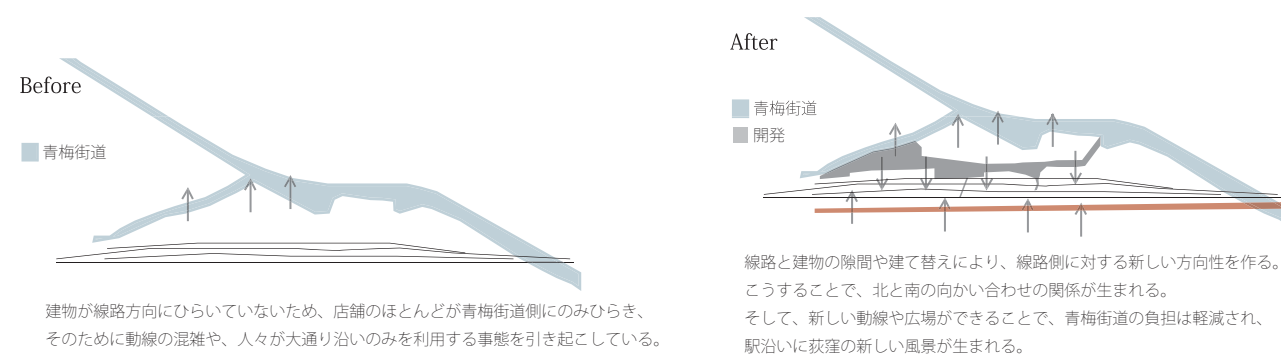
■ 南北に特徴をつつ線路



敷地周辺は線路により北と南が分断され、それにより雰囲気や商業施設に違いのあるまち並みを作り出している。その2つの特徴の延長線上としての線路が、緩やかに北と南を繋いでいくことで、それぞれの良さを残しながら、一つのまちとしての一体感を持つ、新しい寂れた風景を作り出す。

■ わかつものから繋ぐものへ

狭帯の地平線にある線路の風景を活かしつつ、まちの点と点を繋げていくように駅を作っていく。その駅は駅ビルや、目的地としてだけそこにあるのではなく、本来まちの「はじまりの場所」として、人々の生活がまちに広がっていく玄関としてそこにあべきなのではと考える。そうやって、線路沿いの風景一つ一つに目を向けながら発展し、人々がまちと駅という場所を一体のものとして体感するとともに、アクティビティが距離を超えて広がっていくようなまちを作る。



都市の中に駅という施設があるのだが、そこは南北の人の動線を通るものになってしまっている。都市と駅との境界線をはっきり分けたいように、ホームが駅というよりは街の延長線となるようにする。

